

Deuteronomy 25:7-19, 26:1-13, 27:1-26

(申命記25:7)「しかし、もしその人が兄弟の、やもめになった妻をめとりたくない場合は、その兄弟のやもめになった妻は、町の門の長老たちのところに行って言わなければならない。『私の夫の兄弟は、自分の兄弟のためにその名をイスラエルのうちに残そうとはせず、夫の兄弟としての義務を私に果たそうとしません。』」

もしも兄弟か親戚が彼女と結婚したくない場合、ご覧のとおり、彼女はその人を法廷に連れて行くことができました。

(申命記25:8)「町の長老たちは彼を呼び寄せ、彼に告げなさい。もし、彼が、『私は彼女をめとりたくない』と言い張るなら、その兄弟のやもめになった妻は、長老たちの目の前で、彼に近寄り、彼の足からくつを脱がせ、彼の顔につばきして、彼に答えて言わなければならない。『兄弟の家を立てない男は、このようにされる。』彼の名は、イスラエルの中で、『くつを脱がされた者の家』と呼ばれる。」

その男性が彼女と結婚することを拒否したなら、その女性は彼を法廷に連れて行くことができました。その当時は、町の門のところで法廷がもたれていました。彼女は長老たちに事の次第を告げました。それでも彼がやもめと結婚することを拒否したなら、罰則が科されました。彼は定めに従ってしなければならないとされていることを行わないかどで、恥辱を与えられます。このことは、彼が自分の兄弟に、家族に、部族に、国に、神さまに不実だという事実を明らかにします。この人は恥辱を受けます。

ここに、神さまがどのようにやもめを守られるかの驚くべき実例が書かれています。ルツ記に入ったときに、この定めが実際に効力を発揮するのを見ます。ルツ記の中ではこの定めが、効果的に用いられています。

これがイスラエルの家族にどのような影響を与えたか、想像できますか？エフライムの地に4人の息子たちのいる家族が住んでいたとしましょう。ひとりの息子が、毎晩毎晩明かりを持って出かけ、寝るために帰って来ると、口笛を吹いているのです。まもなく家族が集まって、兄弟たちが彼に訊くのです。

「毎晩、どこに行っているんだい？」彼らは独自のちょっとした調査をして、同じ通りに娘のいる家族が住んでいることに気づきます。そして、かの兄弟は、認めるのです。

「ボクは、良い隣人政策の支持者なんだ。引っ越してきたばかりのあの家族を訪問しているんだ。」そして彼は、あの娘との結婚を考えていることを認めます。さて、もしこの兄弟たちがその娘のことを何とも思っていなかったら、何が起これると思いますか？彼らは次のように言うことでしょう。

「兄さん。本気になる前に、お医者さんに行って、健康診断を受けてくれよ。あの娘と結婚する前に、兄さんが健康だってことを確認しときたいんだ。ボくらみんな、彼女をもらわなきゃならないなんてのはいやだからね。」彼らは本当に用件にとりかかりました。結婚するというのは、家族のできごとでした。これは家族の結束を固くするため、やもめを保護するため、そして同時に土地を守るための神さまのやりかたでした。お分かりのように、これが土地がいつでも同じ家族のものであり続けるための方法だったのです。これは彼らにとって、とても良い定めでした。

このあとは、人々がいっしょに戦っているときのもめごとに関する厳しい罰則が書かれています。また、神さまはご自分の民に、ものさしやはかりを正確にしておくように命令されます。彼らは、ビジネスの取引において、絶対的に正直でなければなりませんでした。

アマレクのさばき

出エジプト記17章に、イスラエルの子らがエジプトから出てきたときの、彼らに対するアマレクの攻撃のことが記録されています。アマレク人たちは、砂漠で略奪していた放牧民でした。

(申命記25:17-19)「あなたがたがエジプトから出て、その道中で、アマレクがあなたにした事を忘れないこと。彼は、神を恐れることなく、道であなたを襲い、あなたが疲れて弱っているときに、あなたのうしろの落後者をみな、切り倒したのである。あなたの神、【主】が相続地としてあなたに与えて所有させようとしておられる地で、あなたの神、【主】が、周囲のすべての敵からあなたを解放して、休息を与えられるようになったときには、あなたはアマレクの記憶を天の下から消し去らなければならない。これを忘れてはならない。」

イスラエルはレフィディムで、アマレクからいわれのない攻撃を受けました。これは、モーセが丘の上において、アロンとフルが神さまに祈るモーセの腕を支えたときの戦いです。モーセの腕が上がっているときには、ヨシユアとイスラエルの軍隊は勝ちました。モーセの腕が下がっているときには、彼らは負けました。彼らは最後にアマレクとの戦いに勝利を収めました。そのときに、主はとても面白いことを言われました。

(出エジプト記17:14)「…わたしはアマレクの記憶を天の下から完全に消し去ってしまう。」
(訳注:英語では、「あなたは…消し去らなければならない」となっています。)

先にも申し上げたとおり、アマレクは肉を象徴しています。つまり、アダムから受け継いだ、墮落した性質です。神さまはその古い性質を、最後には片付けてしまわれるおつもりなのです。その性質を持ったまま天国に行くことは不可能です。アナタも私も、神さまに絶対に従順になれない古い性質を持っているのです。ローマ人への手紙に入ったら、この課題をかなりじっくりと取り扱います。アマレクは、肉を説明します。この人生に生きている限り、私たちは肉を片付けてしまうことはできません。

(出エジプト記17:16)『それは「主の御座の上の手」のことで、【主】は代々にわたってアマレクと戦われる』と言った。」

私たちは23章で、肉は私たちがさげすむべきものではないことを見ました。禁欲主義になったり、押さえつけようしたり、超敬虔になったりして肉を克服することはできません。そんなことをしても、何も達成しません。でも私たちは、私たちひとりひとりの中で戦いが起こっていることを認める必要があります。霊と肉との戦いです。

(ガラテヤ5:17)「なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。」

私たちは戦うことで肉を克服することはできません。肉を克服する唯一の方法は、神さまの御霊におゆだねすることです。神さまの御霊だけが、私たちの人生の中に御霊の実を結ぶことができるのです。主は、アマレクの記憶を天の下から完全に消し去ってしまう、と言われます。神さまが、肉をいつの日か片付けてくださるおつもりでおられることを神さまに感謝します。

26章

テーマ:初物—感謝をささげる。

この章には、初物のささげものに関連した、美しい儀式が書かれています。この地のすべての産物は神さまから来たものであること、神さまが善なるお方であることへの感謝の表現として、イスラエル人たちは、最初に熟したものの一部をささげものとして神さまに持って来ました。

(申命記26:1-4)「あなたの神、【主】が相続地としてあなたに与えようとしておられる地に入って行き、それを占領し、そこに住むようになったときは、あなたの神、【主】が与えようとしておられる地から収穫するその地のすべての産物の初物をいづらか取って、かごに入れ、あなたの神、【主】が御名を住まわせるために選ぶ場所へ行かなければならない。そのとき、任務についている祭司のもとに行き、『私は、【主】が私たちに与えると先祖たちに誓われた地に入りました。きょう、あなたの神、【主】に報告いたします』と言いなさい。祭司は、あなたの手からそのかごを受け取り、あなたの神、【主】の祭壇の前に供えなさい。」
祭司は、主に初物のささげものをするとき、神さまがこの民を慈悲深く扱われ、エジプトでの抑圧から解放して、彼らをご自分の約束された美しい地に連れて来られたことを振り返らなければなりませんでした。

(申命記26:5)「あなたは、あなたの神、【主】の前で、次のように唱えなさい。『私の父は、さすらいのアラム人でしたが、わずかな人数を連れてエジプトに下り、そこに寄留しました。しかし、そこで、大きくて強い、人数の多い国民になりました。』」

注目していただきたいことがここに書かれています。彼は最初に告白を持って神さまのもとに行きました。イスラエル人は告白しました。「私の父は、さすらいのアラム人でした・・・」(訳注:英語では A Syrian ready to perish was my father.となっており、直訳すると「死んでしまうところだったシリア人が私の父でした」となります。)アブラハムはイスラエル人だったのでしょうか?いいえ、実際そうではありませんでした。イサクはどうだったでしょう?実は、イサクもイスラエル人ではありませんでした。ヤコブは?専門的には、ヤコブはイスラエル人ではありませんでした。エジプトに下って行った群衆はシリア人でした。アブラハムは、イスラエル人でもイシュマエル人でもありませんでした。どちらの民族も彼から出たのですから。アブラハムは国籍から言うと、シリア人だったのです。

(申命記26:6)「『エジプト人は、私たちが虐待し、苦しめ、私たちに過酷な労働を課しました。私たちが、私たちの父祖の神、【主】に叫びますと、【主】は私たちの声を聞き、私たちの窮状と労苦と圧迫をご覧になりました。そこで、【主】は力強い御手と、伸べられた腕と、恐ろしい力と、しるしと、不思議とをもって、私たちがエジプトから連れ出し、この所に導き入れ、乳と蜜の流れる地、この地を私たちに下さいました。今、ここに私は、【主】、あなたが私に与えられた地の産物の初物を持ってまいりました。』あなたは、あなたの神、【主】の前にそれを供え、あなたの神、【主】の前に礼拝しなければならない。」

イスラエル人にとって、このときは本当の感謝のときとなるべきでした。私たちにとっての感謝祭は、私たちが賛美のいけにえと感謝とを神さまに持って行くときです。それは良いことです。私もそのカテゴリーに入りますが、私たちのうちのほとんどは、七面鳥のすごいご馳走を食べます。普通、友人たちが私たちが夕食に誘ってくれます。前回の感謝祭は、すてきなときでした。でも、私たちのうちのどれだけの人数が、感謝祭の日に神さまに本当にささげものをしているのでしょうか?イスラエル人はそうしました。それが感謝祭の始まりでした。もし私たちが歴史をさかのぼって、ピルグリムや清教徒たちを調べてみれば、彼らがわずかな資源の中からその日に神さまにささげものをしたことが分かります。私たちの唇で感謝と賛美とをささげるのはすばらしいことですが、私たちはそれをお財布をもって支持するべきです。神さまのみことばの中では、賛美(praise)とお財布(purse)はいっしょのところにあります。

この章の第二の部分は、イスラエル人の神さまへの従順の宣言を扱っています。

(申命記26:12-13)「第三年目の十分の一を納める年に、あなたの収穫の十分の一を全部納め終わり、これをレビ人、在留異国人、みなしご、やもめに与えて、彼らがあなたの町囲みのうちで食べて満ち足りたとき、あなたは、あなたの神、【主】の前で言わなければならない。『私は聖なるささげ物を、家から取り出し、あなたが私に下された命令のとおり、それをレビ人、在留異国人、みなしご、やもめに与えました。私はあなたの命令にそむかず、また忘れもしませんでした。』」

もしイスラエルが神さまの命令を守るなら、神さまは彼らをご自分の特別な民とし、彼らをこの地球のすべての国々の上に置くと約束しておられます。

27章

テーマ:その地の将来。不従順に対するのろい。

さて、申命記の中で最も活気のある部分のひとつにやって来ました。これは今、モーセの第三の演説です。この演説は、この地の将来についてを顧慮した、この書物の次の主要な部分に属しています。これは申命記の第三の主要部分で、27から30章に広がっています。この中に、神さまがイスラエルの国と結ばれた、いわゆるパレスチナ契約が書かれています。

私は、申命記28から30章を、彼らがその地に入る前に、前もって書かれたその地におけるイスラエルの歴史、と呼んで来ました。申命記29章から30:10は、パレスチナ契約です。

この部分が始めるにあたって、契約について、何か言わなければならないと思います。契約と言うことは、もうすでに何回か出て来ました。契約にはいろいろな種類があります。個人が個人とお互いに契約をすることがあります。そのような種類の契約が、聖書の中に書かれています。そして、国同士で交わす契約があり、それも聖書の中にいくつか書かれています。それから、旧約聖書の中で神さまがご自分の民と、また全人類と結ばれる契約があります。私たちはすでに、アダム契約、ノア契約、アブラハム契約、そしてモーセ契約を学びました。今、私たちは、パレスチナ契約に到達しました。

神さまが結ばれる契約は、ふたつの違う分類に分けられます。条件付きと、無条件です。永遠の契約と、一時的な契約と呼ぶこともできるでしょう。永遠の契約は、永続する契約で無条件です。一時的な契約は、条件付きの契約です。このふたつを区別することが大切です。

神さまがアブラハムと結ばれた契約は、無条件の契約でした。神さまがモーセと結ばれた契約である十戒は、条件付きの契約でした。

(出エジプト記19:5)「今、“もし”あなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはすべての国々の民の中であって、わたしの宝となる。全世界はわたしのものであるから。」

これから学ぼうとしている、数章にわたるパレスチナ契約は、無条件の契約です。

この契約は、イスラエルの将来に関するものです。この人々は今、ヨルダン川の東岸に立っています。彼らはこの地に入る準備をしています。これは新しい世代です。古い世代は、荒野で死にました。モーセ自身もこの地には入りません。申命記はモーセのためのレクイエム(鎮魂歌)で終わることをあとで見ます。彼は死にますが、人々は新しいリーダーのもと、この地に入ります。さて、この特別な部分は預言的で、今まさに彼らが入って行こうとしているこの地での、彼らの将来に関係があります。ここには、神さまのみことば全体の中で、もっとも顕著な預言のいくつかが書かれています。

(申命記27:1-3)「ついでモーセとイスラエルの長老たちとは、民に命じて言った。私が、きょう、あなたがたに命じるすべての命令を守りなさい。あなたがたが、あなたの神、【主】が与えようとしておられる地に向かってヨルダンを渡る日には、大きな石を立て、それらに石灰を塗りなさい。あなたが渡ってから、それらの上に、このみおしえのすべてのことばを書きしるしなさい。それはあなたの父祖の神、【主】が約束されたとおり、あなたの神、【主】があなたに与えようとしておられる地、乳と蜜の流れる地にあなたがたが入るためである。」

彼らが渡って行ってその地に入るとき、十戒を石に書きしるして掲げるように命令されました。土地の保有権、彼らがそこに住むことは、神さまへの彼らの従順によって決められるのです。これは条件付きの取り決めでした。でも、その“地”はどんな条件もなしに彼らに与えられました。神さまはその地をイスラエルに与えられました。それは無条件の契約です。神さまは、イスラエルをその地に連れ戻されます。なぜなら、その地は彼らのものだからです。現在私たちが、そのことを真に理解することはとても大切なことです。

(申命記27:4-8)「あなたがたがヨルダンを渡ったなら、私が、きょう、あなたがたに命じるこれらの石をエバル山に立て、それに石灰を塗らなければならない。そこに、あなたの神、【主】のために祭壇、石の祭壇を築きなさい。それに鉄の道具を当ててはならない。自然のままの石で、あなたの神、【主】の祭壇を築かななければならない。その上で、あなたの神、【主】に全焼のいけにえをささげなさい。またそこで和解のいけにえをささげて、それを食べ、あなたの神、【主】の前で喜びなさい。それらの石の上に、このみおしえのことばすべてをはっきりと書きしるしなさい。」

神さまの律法は、目立つように掲げられなければなりません。事実、彼らがどこへ行っても彼らの目の前に律法がおかれるべきでした。彼らの家の門柱にさえも、書かれるべきだったのです。

(申命記27:9)「ついで、モーセとレビ人の祭司たちとは、すべてのイスラエル人に告げて言った。静まりなさい。イスラエルよ。聞きなさい。きょう、あなたは、あなたの神、【主】の民となった。あなたの神、【主】の御声に聞き従い、私が、きょう、あなたに命じる主の命令とおきてとを行いなさい。その日、モーセは民に命じ

て言った。あなたがたがヨルダンを渡ったとき、次の者たちは民を祝福するために、ゲリジム山に立たなければならない。シメオン、レビ、ユダ、イッサカル、ヨセフ、ベニヤミン。」

彼らが約束の地に入ったとき、人々の祝福はゲリジム山から宣言されなければなりません。モーセは、祝福をする部族を示しています。

申命記27:13)「また次の者たちはのろいのために、エバル山に立たなければならない。ルベン、ガド、アシェル、ゼブルン、ダン、ナフタリ。」

のろいを宣言する部族は、エバル山にいかねばなりません。これらの山々は、サマリヤの女が井戸にいた、あの地域にあります。あの井戸は今もそこにあります。祝福はゲリジム山から、そしてのろいはエバル山からでした。

今、のろいのリストが与えられます。彼らがその地に入ってから、彼らの土地保有権は条件付きです。各世代はテナントで、地代を払わなければならない、と言えるでしょうか。神さまが地主であり、地代は神さまへの“従順”なのです。実際、国はテナント以上のものです。なぜなら、神さまはイスラエルに永遠の所有としてその地をお与えになったからです。ところが、ある世代が神さまに従わないとき、その地は永遠の所有として彼らのものではあるのですが、その世代はその地から追い出されました。あの不動産が、この地球の北半球でもっともデリケートな地点であるのは、そういう理由からです。とても多くの人たちが、たった今あの地で起きていることが、世界大戦の引き金になりうると信じています。たしかにそれは本当です。

ここには12ののろいが書かれていますが、それらは説明を要しないので、詳細に入っていくことはしません。

(申命記27:15)「『職人の手のわざである、【主】の忌みきらわれる彫像や鑄像を造り、これをひそかに安置する者はのろわれる。』民はみな、答えて、アーメンと言いなさい。」

これは十戒の最初のふたつに関わります。

(申命記27:16)「『自分の父や母を侮辱する者はのろわれる。』民はみな、アーメンと言いなさい。」

これは十戒の5つめを扱っています。

(申命記27:26)「『このみおしえのことばを守ろうとせず、これを実行しない者はのろわれる。』民はみな、アーメンと言いなさい。」

この章のすべての節を読むときに、それらはすべて十戒を破ることを取り扱っていることがお分かりになるでしょう。